

令和4年度第1回 田尻町保幼小中一貫教育検討委員会 議事録

1 開会及び閉会の年月日時及び場所

開 会	令和4年11月28日(月)午前10時00分
閉 会	令和4年11月28日(月)午前12時00分
場 所	田尻町教育センター 2階 一般教室2

2 会議に出席した者の職及び氏名

委 員	岩野 清美委員、谷口 綾香委員、妹尾 晃典委員、森下 かおり委員、 中村 まき子委員、池本 勝利委員、明貝 一平委員、西阪 純也委員、 栃木 孝正委員、田津原 淳委員、織田 容子委員(欠席)
事務局職員	馬野教育長、横上教育次長、米良理事、森下こども課長、伊賀学事課長、 古家一貫教育推進課長、水野一貫教育推進課主幹、大城一貫教育推進課主幹

3 案件

① 教育長あいさつ

〈教育長〉検討委員会開催にあたり委員の皆様へお礼。学校教育専門の岩野会長はじめ、委員の皆様のそれぞれの専門的分野や立場から田尻町の子どもたちの将来のことを考えて活発な議論をお願いしたい。

② 会長あいさつ

〈会 長〉役場から教育センターに向かう途中、子どもたちの元気な声が聞こえてきて、思わず引き寄せられた。保護者の方もたくさんいた。その子どもたちが健やかに成長していけるよう尽力していきたい。

③ 出席者紹介

- ・新委員紹介
- ・昨年度からの委員紹介
- ・事務局の紹介

④ 報告事項

〈事務局〉

- ・これまでの経過と令和3年度答申の取り扱いについて、資料1を基に報告
- ・一貫教育推進事業の手順と進捗状況について、資料2を基に説明

⑤ 議題「めざす子ども像」について

〈事務局〉めざす子ども像について、資料3を基に説明

〈会 長〉義務教育修了後、高等学校へ進学する子や就労する子がいるということで、一定社会に出ていく力をつけるということになる。どのような力をつけてほしいということをお場で議論いただきたい。資料3のこれからのところに教職員検討チームの案とあり、教育のプロの先

生たちの案に何が言えるのか言いづらい点はあるかもしれないが、それぞれ社会教育、企業、保護者の立場から遠慮なく意見を言ってもらえればと思う。

〈委員〉中1ギャップとよく言われるが、田尻町では高1ギャップではないか。妻が田尻町出身で、田尻町は信号が1つしかないと聞いていた。信号の渡り方から学習するなど、閉鎖的な教育が行われていると思う。一貫教育を進めていくうえで、社会に出るときにこのままでいいのかという心配がある。国道も見ずに育っていく中で、社会に順応できないのではないか。めざす子ども像には社会性をキーワードにして考えてほしい。

〈会長〉一問一答ではないほうがいい。和歌山には小学校全体で30人程度、中学校でも60人程度のところもある。子どもたちは高校や社会に出ていくのが楽しみな反面、不安に思う子どもも多い。そういった事例もあるが、社会に順応するとはどういうことか考えていきたい。大学生にどんな勉強をしていきたいかと問うたことがある。人間に対する信頼があれば学びやすい。子ども議会の例では、大人がこんなことをしていたのか、全然知らなかったという感想。人への信頼感が大事ではないか。

〈委員〉社会に順応できるとはどんな力か。人事の仕事をしている中で、転職する機会がマーケット的にとっても増えてきている。日本の社会全体で終身雇用や年功序列という形がなくなっていくと思う。この流れは変わらないだろう。同じ職場で働くという前提はなくなっていく。与えられた環境より、自分から環境を選ぶのも大事ではないか。

〈会長〉環境に飛び込むというのはチャレンジするということか。

〈委員〉環境が仕方のないものではなく、自分で変えられる、自ら自分にあった環境に飛び込んでいくという力も大事で必ずしも順応しなくてもよいのではないかと思う。極論かもしれないが。

〈委員〉社会教育という観点が非常に弱い。資料においても弱い。学社融合と言われているが、社会教育の力を田尻はもっと取り入れるべき。委員も言うように高1ギャップがあるといわれるが、それは裏を返せば中学校まではとても良いということだ。メリット、デメリット両面ある。地域コミュニティは他の市町村よりもいいと思っている。メリットをもっと生かすべき。自立した人間とは、社会教育的には自立は多様で多数の依存先を持ち合わせていることとある。転職が増えてきているということだが、それは多様で多数の依存先を持ち合わせていないということではないか。幼少期からもっといろんな人に会わせるべき。大阪府が掲げる顔と名前が一致する関係づくりが大切。学校が一人歩きするようではもったいない。今回せっかく社会福祉協議会や支援学校の先生も入っているので、地域コミュニティづくりという考え方も入っていると思う。老人ホームと学校は一緒にすべきという意見もある。大阪教育大学荒崎先生は、人は必要とされることを必要とするという考え。子どもたちは必要とされると嬉しい。それを日常にしていくが大事。昔はそれが普通にあった。今は学校の力が弱いと言われるが、親世代が地域コミュニティの重要性を知らないのが当然だ。

〈委員〉委員が言っていた高校へのギャップはみんな感じている。校長として大きく引いて学校を見ることがある。11年前に田尻に来て、田尻の印象はとてもいい町ということを感じた。他市はいろんな課題・問題に向き合い、解決のために様々な取組をおこなっている。田尻は井の中の蛙大海を知らずと思うことが多々あった。自分たちは弱いと感じていた。しかし、この後に続く言葉が大事で、されど空の青さを知るという言葉がある。井戸の中の蛙は周りのこ

とを知らないが、空が青いということが一番知っている。空の青さとは、地域や保護者などの愛情。土台はゆるがない。サッカーワールドカップ、世界の解説者の言葉で、日本の弱さは自分たちの強さを知らないことだと聞いた。子どもたちにも君たちは強いんだと言ってあげたい。精神論だけでなく、具体的にどのような環境で、荒波を経験させながら、地域とつながりながらやっていくことが大事。その土台はエンゼルだと思う。

〈委員〉乳児のうちから入所する子が増えている。0歳、1歳から集団生活が始まり、それが1つの小学校にあがっていく。一番大事にしているのは人権教育。ひとりひとり平等。発達の差だけで上下の関係ができないようにしている。岩野先生の冒頭の話にもあったんぢりごっこ。体験したことを遊びにするという環境、教育を大事にしている。そこに地域のことを取り入れていきたい。社会の出来事などを理解できなくても、投げかけていくことを大切にしている。エンゼルの中にはない社会全体のことも伝えている。エンゼルと小学校で運動会の演技の見せ合いを行ったが、兄弟関係などではなく、町のイベントで偶然隣に座った子のことを名前はわからなくても覚えている子がいた。田尻ならではだと思う。そういった関係性を大事にしていきたい。

〈委員〉検討チームの教育目標に自分の価値を見出しとあるが、田尻の中では見出せると思う。広い社会に出たときに自分の価値を見出せるかどうか大事。めざす子ども像には外の社会との接続という意味合いを入れてほしい。それに対してどのようなカリキュラムを組むのか。例えば、大学のように自分で時間割を組む、地域にいるいろいろな経験をした人と関わるなど。

〈会長〉社会とのつながりを考える上で中学校の実践はとても重要になってくる。中学校の取組みについてはどうか。

〈委員〉昔は校則がとても厳しかったが今はずいぶんゆるやかになった。高1ギャップは感じなかったが、厳しいルールの中で生きてきたことで、柔軟さが足りないように思う。すべて右にならなくては、一人一人の能力が発揮できるようになってほしい。

〈委員〉町外から引っ越してきた。田尻に来て思ったのは、転校生などもすぐに受け入れてきてくれる温かさだ。すごく過ごしやすいが、同級生には高1で辞めてしまう子も多かったように思う。それは集団に依存しすぎているからではないか。みんなで仲良く1つのことを成し遂げるのは田尻のいいところだと思う一方、自分の意見を言えない子たちや人と一緒じゃないと恥ずかしいという考えが定着しているように思う。会社や企業では人と同じならすぐに追いつかれてしまうので、自分の意見をはっきりと言えることや、人と違うことは怖くないと思える子になってほしい。自分に自信を持って何かをやっていける子を育てていかないといけない。ずっと集団ではいられない、ずっと学生でもいられない。肯定感を育てる子育てをしていきたい。

〈会長〉人と違うことをすることは恥ずかしくない、自分の意見を言えるためにも自己肯定感・自尊感情はやはり大切だ。自立は多様で多数の依存先を持ち合わせるということ観点で考えたときに支援教育の視点ではどのように考えるか。

〈委員〉地域支援で中学校やエンゼルと関わっているが、本当に田尻のよさを感じている。支援を必要とする子をすごくナチュラルに受け入れられている。検討チームのめざす子ども像にある「自分も相手も大事にする」という点はすでに達成できているように思う。多様なつながり

というキーワードはとても大事だ。本校の高等部の目標でもつながりを掲げている。人とつながる力が大事だ。どのように育成していくか。人と一緒にいることが心地よいという感覚を育ててほしい。それを少しずつ広げていく。いろいろな実習経験を積ませることが大切。いろいろな人とつながるような体験など、学校の中だけでなく、外の人とつながりながら自分の力を発揮していく機会が重要だと思う。

〈委員〉田舎の子、都会の子というようにメリット、デメリットがある中でどのように育てていくか。地域とのつながりを具体的にカリキュラムに取り入れていくことが必要だろう。今もさまざまな体験活動は行われているがもっと発展させていかないといけない。自分自身、田尻で育ち高校でのギャップが一番大きかったように思うが、すぐに消えたように思う。ギャップを乗り越えていくことが大事だ。つながりを広くもつことで乗り越えていく力がつくと思う。教職員チームの検討案は一般的な文言になっているので、一貫教育に特化した一貫教育をイメージしやすい文言にしてほしい。学習指導要領にのっているめざす子ども像がまさにその通りだと思う。足りていないのは一貫教育の部分と田尻の特色が伝わる場所だと感じている。そうでないと一貫教育をする意味がない。

〈会長〉ギャップを乗り越えていくという表現があった。ギャップを解消することも大事だが、ギャップを乗り越えることのできる子というのも大事ではないか。

〈委員〉全体的に学力は高い。なぜなら、学びに背を向けない子が多いからだ。平均的に高くなるのは、他市町村では一定数学びに背を向ける子がいるという実態を考えると当然の結果と言える。そんな中、中学校ではSDGsの学習で地域と関わりながら課題解決を行うというすばらしい取り組みを行っている。地域の人や役場の人と関わることで、子どもたちはとても生き生きしている。小学校では今日も車椅子体験を行っているが、漁業体験など様々な体験活動を行っている。一方、日々の授業では議論や討論、生き生きする場面が少ないように感じている。それを実社会とつなげながら行うことが大事だ。いわゆる教科学習だけではなく、田尻の学びを確立していくことが大事だと思う。

〈委員〉現地建て替えとなった中で、学校を核にしていこうとなったが、学校を核にした地域づくりをしていくべきだ。大人には田尻のよさを取り戻してほしい。学校を核にしたコミュニティづくりが大事になってくると思う。

〈委員〉地域社会との連携の重要性を感じた。田尻のよさを生かした一貫教育を行うべきだ。学校だけでなく、地域社会全体で子どもたちを育てていくという町づくりが必要ではないか。学校の建て替えを契機に地域の教育力をもっと発揮していくべきだ。地域と連携していくカリキュラムをつくってほしい。それが田尻の強みだと感じている。ほかではなかなかできない。地域社会が学校教育に関わることがいかに重要かということが問われている。校舎も地域コミュニティを活かせるものになってほしい。ふれ愛センターの活用も考えてほしい。

〈会長〉地域とつながることで子どもが生き生きとしているという言葉が印象的。一方保護者代表の方の意見にあるように発言力に対する課題ということを見ると、悪い言い方にはなるが、体験活動で子どもたちがお客さんになっているのではないか。体験を学びに変えるという観点で先生はどのようにお考えか。

〈委員〉具体的な例。ほかの一小一中において、言語能力が大変低い子で地域の中学校では大変厳し

いと思える子どもがとても活躍をしているというケースがある。日々まわりの子たちから非常に受け入れられているので、複雑なやり取りが必要なく、学力テストにおいても検査結果からは考えられないような点数を出すことができていた。それは間違いなく、周りから受け入れられているという安心感から来るものだろう。一方、言語能力を試される場面が少ないのだろうと感じた。課題解決を他者と協働しながら行い、さらにそれを発信するといういわゆる厳しい環境におかれる場面が少ないのではないか。ただ、そういった環境がないから言語活動がなくても活躍していける子もいる。その両面が両立できればもっとすてきだ。子どもたちが考えて協働して発信していける取組みを意図的に設けることが重要だと思う。

〈委員〉町内イベントのタコカーニバルの SEA 級グルメでの大学生の話。大学を休んでいた学生に、もともと料理に興味をもっていたので声をかけたところ、試作から提案までリーダーシップを発揮してくれた。このように自分は社会の役に立つことができたと思える経験は大変貴重だ。小学生や中学生だけでなく、大学生でも十分成長できると思う。

〈委員〉田尻町ならではの地域との密着性の高い取組みは大変効果的だ。先ほど必ずしも環境に順応する必要はないと伝えたが、環境を変えていける力は重要だと思う。積極的に議論できる人は、まわりからの評価も高くなる傾向にある。

〈会長〉中学生へのインタビュー経験から。中学 3 年生が子ども議会でバス通学に関する主張を行ったが、「なかなか聞き入れてもらえず困っていたが、まわりの生徒たちにみんなはどう思うかと投げかけ一人ずつ発言を促すとみんな意外と意見をもっているということがわかった。まわりの意見をしっかり聞こうと心がけると聞き手の反応も変わるということがわかった。」という内容。コミュニケーションによってまわりの環境も変えることができると感じた。

〈委員〉ももとは積極的に話をする性格ではなかった。今しゃべられるようになったのは環境や経験もある。いろいろ議論したり、発言できるようになったりする力は重要だが、委員の言うように言語能力が劣る子の場合は議論できるようにするような取組みだけでは成長しないし、そもそもそういった子たちには適用しない。一人ひとりが自分の能力を発揮できる、活躍できる場を設定することが大事だ。そして、子どもたちも自分の能力が発揮できる状況について理解することも合わせて大事になってくるのではないか。これまでは議論する力を伸ばしていこうとまわりが頑張れば、本人の力も伸びてくると思っていたが、そうではないと感じた。言語能力が低い子にとっては、それでは落ちこぼれていく可能性があるので、活躍できる場が何なのか、その子に気づかせることが大切だと感じた。

〈委員〉盆踊りの役員会の経験。青年団が中心になるべきだが、全然活躍できていなかった。田尻の子の現状ではないか。

〈委員〉学校で自分の力を発揮しやすい場はクラブや委員会だと感じた。自分のやりたいことや言いたいこともクラブ・委員会の場面を利用すればいいと思う。ほかにも給食調理場の活用はどうか。地域の人と一緒に給食を食べたり、子どもも調理の経験をしたりしたらどうか。田畑での農業経験もいいと思う。学校は丁寧すぎる場所があるので、ある程度子どもたちにまかせてもいいと思う。

〈会長〉学校でやっていくこと、地域社会と一緒にやっていくことが整理されてきたように思う。15 年間のカリキュラムの検討において、学力だけではなく、つけたい力をつけるためにどうす

ればいいかというのが今後の検討課題になってくるだろう。

4 その他

〈事務局〉

- ・ 本日の委員会の開催にあたってのお礼
- ・ 次回の日程調整

令和5年2月8日（水）13時～15時で仮決定